

工 淨

1976 - 3

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一週一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別授承認雜誌) 第三二五号
昭和五十一年二月二十五日印刷 昭和五十一年三月一日発行
第四十二卷 第三号



S. Kuz

徳不孤
必有隣
信

徳不孤必有隣

—徳は孤ならず、必ず隣有り—

河原 信三

(信州善光寺信徒総代)

この言葉は、論語里仁篇にでていゝもので、徳義を守っているものが孤独になるはずがない。必ず同志のものができてくる。ちょうど家が一軒あれば隣りに近所ができるようなものである、という意味である。

現代人は孤独である。自己中心の生き方の中に終始して、徳を積み、徳を守ることが忘れてゐるからであらう。現代風にいえば、人間愛にかけてゐる。ただし、人為的に、利害打算の心では、まことの積徳はなされない。自然に身にそなわつたものが、ほんとうの徳というものであらう。年老いてみて、はじめて老人の孤独さを味わつたが、お念仏に親しむことによって、煩迷の心が和らぎ、あなたまかせの日暮しが漸くできそうである。

三
月
号



目次

老と醜……………	一瀬直行(2)
△彼岸法話△みちのくの春彼岸……………	中村真道(4)
釈尊の教えと現代……………	奈良康明(8)
現代とこころのシリーズ②……………	

『彫刻』の心……………	山田良定(13)
医学と宗教……………	福井光寿(17)
浄土教の流れ△三△一年を一秒に換算しても……………	竹中信常(20)
法数術語十二ヵ月(三月の巻)……………	宝田正道(26)
△読者の声△無意識から出てくるもの……………	吉田勇之助(31)
書の四季(十二) 墨縁……………	林錦洞(34)
念仏ひじり三國志(二十三) 法然をめぐる人々……………	寺内大吉(38)

表紙 久住 静雄画

カッ ト 大正大学美術部



老と醜

いちの

一瀬直行

なおよき

(東京都台東区今戸瑞泉寺住職)

私は明治末年の生れである。年ごとにあの人もこの人もという風に身辺から姿が消えていく。住所録は隙間だらけになっていった。特別な生きずる人は別として、それらの人を見送るたびに取残されたような気がする。

明治生れが集った時、あなたは何年生れですかと、たずね合っている。何年生れですと答えれば、その時自分の方が一年でもおそれれば、口にくそ出さないが、ほんと救われたような気がするらしい。それは顔色からありありとよみとれる。つまりここまでくると、わずか一年のことが、ひどく大切なことを語

っている。

人からきかされていたが、七十の声をきくとがくんと年老いた気になるという。そんなものと、気にもかけなかったが、実際に自分がその年になってみると、第一体の方がいうことをきかなくなる。血圧が高くなる。視力が衰える。歯が駄目になる。足が思うように動かなくなる。息ぎれがする。これは体質にもよることだが、気だけは強気でいても、体の方が自由に働かなくなる。もっとも私の場合は若い頃から使いが荒らかった。酒煙草は人並以上だし、放蕩も一人並であったから、痛みが早くくるのも当然といえる。

老いは氣にならないが、心の醜さだけには落ち入りたくない。哀れみがかったり、うしろ指をさされたりする姿にはなりたくない。これも年よりの見栄っ張り、と頑固さからきているのかもしれない。

自分の過去を振り返ってみて、時代の移り変りや惨事を、よくもここまできり抜けてきたと思う。何度かのつびきならぬ羽目にたたされてきた。そのうちでも明治四十三年の大洪水、関東の大地震、三月九日の戦災、そのたびにおきる時代の変遷や、途方に暮れた生活を思い出す。私にとっては、この不幸がもの書きに得難い幸せをもたらしてくれたと思っている。決して負惜しみからいうわけではない。

明治大正から昭和にかけての左翼はなやかな頃、戦時中の右翼全盛の頃、いずれにも組することなく、自分の道をひとり歩んできた。そのための圧力を身いっぱいと感じながら、なおおのれを守ってきた。とはいふものの、こんなことはきざつぽく、照れ臭く、もともと口に出していうべきことではない。

この頃自分が築きあげた古城が、いよいよ色褪せて

いき、崩れおちそうなのを感じる。世相の移り変りとはかくとして、も早や明治大正の物差をもつてしては、今日の様相をはかることはできない。戦中戦後の若い人たちが世の中の第一線にとび出し、活躍が続いている。そこに両者のへだたりを、まざまざと見せつけられる。

たとえば、生命の尊さを知ることとか、人はそれなりに相手を尊敬しなければならぬとか、お互いの間は信頼感によってもちつもたれつしているとか、これは一例にすぎなく、常識的なものの考え方であるが、今日そのまま実際に通用されなくなった。

両者の相異を述べれば、世の中がよくも悪くも変わってきている。既に死滅したも同様で、はげしい現実にはあてはまらないという。それはそれなりに道理のあることがわかるし、頭から否定するわけではない。けれどやはり明治気質は、老人の頑迷さといわれても、自らの節をうるべきでない。

今年もまた身辺から幾人かの明治大正生れが、更に消えていくことであろう。



二 彼岸法話 二

みちのくの春彼岸

なかむらしんどう
中村真道

(仙台市新寺小路愚鈍院住職)

暖い穏かな正月を送った途端、寒波が襲って来て、みちのくといっても比較的過し易い仙台も真冬日という氷点下一〇度以下を記録する様な寒さに見舞われました。黒潮に洗われる仙台湾の恩恵もどこかへすっ飛んでしまった。今年の新春大寒でした。春彼岸を迎えても仙台では春の牡丹雪に震えることもある当地は本当に春よ来いと切に願う季節でもあるのです。

拙寺愚鈍院の墓地は仙台東部地区区画整理事業の新しい街づくりに協力して近郊の葛岡の地に改葬移転をしました。南面の丘陵地帯に造成された公園墓地で春の彼岸

を迎えますと、緑の芽が長い冬を過して来た眼には鮮かにとび込んで来るといふ感じを与えてくれます。遠く西の方には頂きに未だ雪をおいた奥羽の山なみがくっきりと見え、周囲の山々も春の来たことを知らせる様に変っていることを見知ることの出来る場所なのです。老いも若きも幼な児も春の彼岸には長閑な大自然の中の墓参りに、生きている喜びがしみじみ味合える恰好の場所でございます。澄んだ空気の中に愚鈍院別院のスピーカーを通して仏教讃歌のメロデーが流れて来ます。エレクトロンの柔かい音色が人々の心に春のなごみを一層かきたて

てくれます。耳を傾けて聴き入りながら、亡き人を御先祖さまを偲び、想いおこして合掌する姿は本当に尊いものです。これらと共に墓参りの後、春の野草を摘み取る草摘みに打興する嬉戯たる家族はまた一幅の絵になります。そんな風景が私にとっては彼岸と共に春の序章の開けゆくという感を強く受けとることが出来るのです。

——「私共はお彼岸と無造作に口を出して申しておりながら、お彼岸は寺詣り墓参りをするのがお彼岸の全ての行事であると受け取って、毎回彼岸がやってくる度に慣習化しているだけではないか」と申す人もおります。然し自然のただずまいの中の公園墓地にお参りする人々を眺めておりますと、そこには知らず知らず今生きている私共、今この生かされている私共をしかりと知ることの喜び、そしてその生命のよって来る所のご先祖さまを考えると、唯親から子へと受け継いだ墓参りであっても、そこにこそ生命の尊さに両手を合わす無心の仏心を頂く生きさまが現出されておると思うのです。

子供達の「念仏のつどい」が毎年もたれますが、その時の野外活動の一日がこの葛岡墓地公園の愚鈍院別院でもたれます。ここの弥陀三尊仏は京都の松久仏師の作で、

松久仏師は『仏を刻んで六十年』の著者でもあります。非常に柔和な御面相でにこやかに微笑んでおられます。これも毎年のことですがその前で子供たちがこけし人形に彩画して、作品を「念仏のつどい」の土産にして持ち帰りますが、半分以上の子の作品のそのお顔が弥陀さまのお顔に似ることの不可思議さに驚かされます。純真な子供たちが真先に心に映じたみ仏のお顔が忘れられないのでしょうか。それとも松久仏師の入魂の技力が感応道交して行くのでしょうか。全く不可思議なことなのです。春の息吹きに大地より萌え出た野の草々の芽ばえ、樹々の枝々に芽をつけた若芽の色に長い冬を越し終えた人々が接して知る大自然の生きる姿に、生かされている自分の幸せを感得させられるでしょう。——参詣の道々をこちらからあちら側へ走りよぎる山鳥、雉子の美しさに子供たちは放心したように立ち止って驚きの眼をみひらいて、しばし声もなく鳥の走り込んだ夢にじっと見入っていることが度々あります。そしてまた野の草々の間を野兎や木ねずみが走り去ることもあります。この地は禁猟区になっておりますから鳥獣も命のそこなわれないのを知っているのでしょうか。野の草々も樹木も鳥も小動物

もそして人間さまも大自然の生命の営みの中に生かされていることが味合える幸せは、厳しい冬を過し来てこそ身体で知ることの出来る悦びなのでしょう。こんな風に大自然の中の彼岸の風物を考えてきますと彼岸と私共のかかり合いは本当に深い処でかかり合っていると確られるのです。詩人の長田恒雄氏はこんな感想をのべておられます。——お彼岸に、お寺やお墓に参るといふ習慣は、何気なくやっているのですが、考えてみるとなかなか意味のある習慣だと思われます。遠い祖先や、身近な故人の墓に詣でたり、寺参りしてお説教をきいたりするのに、この新しく生命よみがえる季節をあてたということとは少くとも自分の生命というものを見つめて、まじめに考えるのに誠にふさわしいと思います。秋の彼岸が衰えゆく生命の反省に役立つように、春の彼岸はいかに生命を大切にするかという心構えをする好機だと思ふのです。「いのち尊し」ということをこのお彼岸にはしみじみと味合いたいものです。——この「生命よみがえる季節」に共感される人は大変に多いと存じます。

幼い時でしたが会津若松の里に旅行しました時、会津の農家の庭先といわず山裾の柿の木の全ての梢に一つ二

つ取り残しの実がついているのが不思議でした。「どうして柿の木のとっぺんに一つだけ忘れて取り残したのかなあ」と申しますと、土地の人が「あれは木守り柿といって取らずにおくんですよ」と教えてくれました。近頃また会津に足を運ぶ機会がありましてその木守り柿が目につき、土地の古老に「木守り柿がまだ続いて残っていますね」とたづねましたら「これは会津の人の心ですからなくなりませんね」と返事が返ってきました。この木守り柿は渡り鳥の為に、そして下枝の一つ二つはこれは旅人の為にあるのだそうです。今度の旅ではこんな話も聞きました。「会津は戊辰戦争で年若い少年白虎隊まで繰り出して徹底抗戦した。幼い生命まで犠牲にする野蛮で粗野な人々だと明治新政府の側の人々に思われてしまったと思います。それで会津はそんな人々の住んでいる処ではありませんと理解してもらう、何かを真剣にやらねばと、木守柿の伝統を会津の隅々まで実現しようとな努力したのです。会津の空を飛び過ぎて行く渡り鳥にすら、心の情けを注ぎ込む情味ある心の持ち主であると会津に足を踏み込んだ人々は感得されるでしょう。渡り鳥が実をついばみながら落して行く糞は、翌年のみのりの肥料

の一助になるでしょう。木守り柿が柿の木の命を養う結果になります。そして下枝の実で喉の渴きをうるおし少しでも飢えをいやした旅人はきつと会津の人々の素朴な人情と無言のもてなしに、心穏んで本当に心優しい人々と心の土産をもってそれぞれの故郷に帰って話しをしてくれるでしょう」と、淡々と語ってくれました。み仏の心が木守り柿として輝いて無言の実践行として人々の心に残っていることは尊いことです。私には春の彼岸を迎える時、厳しい辛い冬を耐えてきた人々の心に萌え出る力、生命の躍動の喜びを伝えるとき同時に秋の彼岸の収穫の時、生命の完成の尊さと喜びをいつも考えさせられる心が重なって湧き出るのでございます。

春の彼岸でも、秋の彼岸でも、墓参りすることをもう一歩おしすすめて見つめ直すときに、お彼岸は亡き人、御先祖さまを追慕することによって、生きている私共自身が自分を育ててゆく機縁に出あわせて頂くことでありましょう。春も秋も彼岸は、むしろ生きている人々の為にあるといってもいいと思います。いいかえるならば亡き人々に、御先祖さまにお参りする営みをえにしとして「自分とは、私とは何んなのか」とわが身に、わが

心に、み仏の慈情と智慧のみ光りをあてることなのではないでしょうか。

彼岸の季節になるとまたぞろ靖国問題が騒がれます。

お国の為にと散華して逝った人々を祀る日本人の心を素朴に見直してみたいものです。軍国主義一色にぬりつぶされたと考えられている戦中ですら、念仏の教えをもつて祀り心が支えられて浸透していつて消せなかったことを軍国歌謡といわれる歌に残り歌いつづけられていたことをしっかり見つめ直すべきだと思います。その中に、

——両手合せて膝まずき、拝むはずみのお念仏、はっと気づいてうろたえて、せがれ許せよ田舎もの——それは念仏申す生活をいい続けた私共の心がそうさせたのです。その人が生きていたら決して判らなかつたであろうことが、その人の死によつてはじめて人生の真意を判らさせて頂けたことこそ本当のご供養になると私はうけとらせて頂きます。生きた人々は、私共は「何をしたらいいのか？」と問われます。

みちくの春の彼岸は暗く、辛い、厳しい冬を通り過ぎて来た私共にいろいろの光を注ぎあて考えさせてくれる季節なのです。



釈尊の教えと現代

奈 良 康 明
な ら やす あき

(駒沢大学教授・文博)

(一)

学生時代から、とにかく、仏教を勉強しているから、釈尊の教えについても一応のことは心得ているつもりでいる。無常とか無我、苦、四聖諦、八正道などという術語も、説明しろといわれれば何とか恰好をつけることもそう難事ではない。

しかし、そうした説明が何となく空しい、という実感が最近ある。なにも術語の解説、研究がまちがっているとか、意味がないとかということでは決していない。ただ、コトバの解説が私自身の生活と関係ないところで歩き出している感じなのである。よく画に描いた餅というが、正にそれなので、餅の形状やら栄養分、製造過程などをいくら知っても、結局だまって口をあけて喰べなければ腹はふくれない。コトバの単なる説明にはミズミズさが欠けているのである。



こうした考えが出てきた一つの契機となったのはある青年の死にさまたった。二十五歳で亡くなったこの人は癌を宣告されていた。身体内部が日一日、刻一刻とむしばれていくことを、うずくような思いで自ら感知することの不安は想像するにあまりあろう。おそらく治ることはないのだ、と知りながらも、私たち人間はその希望を捨てることは出来ない。だからこの青年も、少し調子が良くなると、あるいはこのまま癒ってくれないのかとかすかな希望の火をかきたて、しかし、またすぐに症状は悪化して今度は絶望におちいった。病気にはその時々で調子の波があるから、常にこうした希望と絶望が交錯する。希望と絶望の波のゆれをくり返しながらも、実は、その振幅全体は次第々々に下降して行った。今日の希望は昨日の希望よりも暗く、明日の絶望は今日のそれよりも深い。この青年は死に直面し、死をおそれた。かぎりなく生を望んだ。しかし、死は確実に迫ってくる。

彼は苦しみ、悩み、宗教書などを読みあさりながら、結局最後にある諦念に達したらしい。死期の近づくにつれ、いわば、フツと底のぬけたような転機があり、自分の不幸な現況を全く別の角度から見る事が出来た。その結果は現状をあるがままに受容し、そればかりか、それのおおらかな肯定であり、すべてが仏の世界の中でおこなわれていることの自覚だった。彼は死の直前に言い切っている。「君たちは元気でやってくれ、私は死んでゆく。これでいいんだ」。そしてつづけて言った彼の言葉を私は忘れることは出来ない。

「人生って美しいもんだね」。

死に臨む男の、常識的には理解を絶するようなこの言葉は、決してヤケをおこしたものでなければ、情念に埋没して自らを偽った表現でもなかった。彼には、死を迎え、死を超える何らかのたしかなる諦念が生じていたのである。



(一)

人間とは不思議な存在だと思う。異常な状態に落ちたとそれを正常に戻そうとする力が自づと働く。肉体を傷つければ自然に治癒するし、心が病めばそれに応じた別個の視座が出てきて心のいたみを和げる。

この青年も、死は避けられないと知った時、その死から逃げるのを止め、それにたち向かい、受容することによって死の苦を克服することが出来た。それにしても、死に直面する人の、人生の美しさに対する心からなる詠嘆は何ということであらうか。人間の心の窺^{うかが}いすべからざる自在の働きの深さ、広さを思わずにはいられない。

この例をみるにつけ、私はあらためて釈尊の偉大さを思った。この青年は死に直面せざるをえなかったからこそ、苦闘し、その克服の道をみつけた。釈尊は恵まれた環境の中にあり、年若く身体も健全な時に、人生の苦を実感した。老・病・死に代表される苦の避けえざることを自分の問題としてうけとめた。その結果の修行であり、悟りだった。この青年の得た諦念よりも、より深く、より自覚的なウナズキを釈尊は順境の中にあつて求め得たのである。

釈尊は八十歳の老齢に達して、自らの死期を悟る。おそらく生れ故郷のカピラヴァストツに行きたかったものであらう。いわば最後の旅に出るのだが、その詳細は『大般涅槃経』という經典に詳しくかかれてゐる。釈尊は道行きの途次、侍者の阿難に身体の衰えや痛さをかくそうともしない。自分の身体は方々を草ヒモでつなぎとめてやっと動いている荷車を



のようなものだともいつている。しかも尚、釈尊は一日、自然の美しさを嘆ずるのである。「アーナンダよ、ヴェーサーリー（の町）は楽しい。ウデーナ靈樹は楽しい。ゴータマカ靈樹は楽しい。……チャーパーラ靈樹は楽しい。……この世界は美しいものだし、人間のいのちは甘美なものだ」。

(三)

これを、例えばご隠居さんが閑にまかせて梅や桜の美しさを鑑賞するのと同じにみてはなるまい。それは単なる感覚上の美しさである。勿論それはそれでいいのだが、釈尊にはもう一つきぬけたところで、人間を含む万物の真の相をみきわめた。したたかな眼の見ひらきがあり、その眼で自然の美しさを見ていたにちがいない。

それは何かというと、すべてのものが、何時もかけがえのない貴重なものとしてある、ということにほかならない。総理大臣も、みずぼらしい小僧さんも皆、まったく同じカケガエのない尊さを与えている。縁起という言葉があるが、私たちも万物も、様々な条件や原因が重なって、いま、ここに、こうした相^{すがた}でいるし、次の瞬間には別の原因や条件の下に別のかたちで存在している。しかしこの時は本物だが、あの時はウソモノだということはない。桜の花は満開に花をつけていても桜だし、散っていても桜である。花を咲かせている桜がいい、というのは私たちは人間の好みなので、桜にとっては何時も本物の桜しかない。

なにかもがうつりかわりながらも、しかし何時でも、カケガエのない本物として存在



していること、それで無常であらうし、無常であることの尊さを見出したのが釈尊の眼の見ひらきだった。人間に即していえば、誰でもが平等に尊いし、山川草木は等しくカケガエのない貴重な存在である。この尊さに気づいたからこそ、釈尊は自然の美しさを嘆えたにちがいないのである。単なる感覚的な好悪ではなかったのである。

すべてが尊いもの、本物としてあること、これをその人や物の「イノチ」といつてもいい。生命ではなくて「イノチ」である。このイノチは万人、万物に具わっているし、これを仏性具与と表現することもある。イノチがあるからこそ、ダイヤも土塊も、どんな人間も尊い。そしてそのイノチを大事にし、より十二分にはたらかせていくことが人間にとって本当に正しく、安楽に生きる道なのだろう。だからこそ釈尊はクシナガルのサーラ樹下に亡くなる時、教えている。「比丘らよ、努力して生きよ」と。これが釈尊の最後の言葉だったという。

考えてみれば、かの癌で死んだ青年は、毎日を充実して生きていたにちがいない。努力とは何も身体を動かすことではない。それぞれの状況において、毎日を、毎時間を、そして毎秒をどう無駄なく、イノチを大切にしつつ生きるか、という真摯さの問題なのではないだろうか。かくしてこそ無常を生きることになるような気がする。

無常を生きることと、無常を頭で理解することは、やはり、大きくくいちがう。そして釈尊が教えたのは生、きることだった。「汝ら努力せよ」という最後の言葉が端的にそれを示している。そしてそのことの大切さと同時に、自らに実行することのいかにむづかしいかを感じている昨今ではある。



『彫刻』の心

—「創」

山 やま

田 だ

良 りょう

定 てい

(彫刻家)

この道を志して二十余年、「創るよろこび」の活動に励んで参りましたが、なかでも、開宗八〇〇年慶讃として、浄土宗保育協会の主唱により、法然上人童形像を発願、岡山県久米南町の誕生寺境内に建立させていただ

たことは、身に余る光栄と自坊の阿弥陀如来のご加護と、

これが発願のため、ご尽力いただいた各位に深く感謝しております。

人間と猿の違いはどこか?という問いかけに、人間は猿より毛が三本多いとか、少ないとか聞かされた幼児期、人間は感情の動物であると教えられた幼年期、今、私たちは果たして人間との違いを、どういう説明をすればいいでしょう。

大阪天王寺動物園のチンパンジー君が、毎日デッサンに通う画学生に恋をしたのか、彼女が園に姿を現わさない時は、食欲なく片隅にすわり込んでいる。彼女がやって来てデッサンを始めると、喜び勇んでポーズをとり、彼女から手渡されるバナナを、食欲も旺盛にいただくということで、飼育係さんを困らせているという記事を読んだ後、一カ月ぐらいたったろうか。生まれて三カ月のチンパンジー君が飼育係さんに抱かれてテレビに出演した時、「今人みしりをする年頃なのか、他人の顔をみると、かくれてしまうのです？」とチンパンジー君が飼育係の胸の中に顔をつけてしまっているのが放映された。決して、人みしりをしているのではなく、人間が恐ろしく、そのような態度をとっているのであろうか、この時の会話の中に、「彼等程感情の高い動物は他にありません」ということがありました。

日々の新聞紙上をにぎわしている、親殺し、子殺し、他人様の命など何とも思わぬような人間社会をみる時、人間と他の動物の違いが、感情の動物であるということでは、納得はいかない筈です。

人間と他の動物の違いのひとつには、人間は刀を使う

ということがあげられます。

ベルクリンやフアーブルのいう本能と知性を思いおこします。

鳥や蟻など、動物は、家をつくり、倉を構え、子孫繁栄と生活に追われながら暮らしているようです。しかしながら、犬が刀をもち、すずめがピストルを使うということはありません。人間のみが刀を使うことができるのです。

それぞれの事業を始め、立派に倉を建て、そのたくわえを刀でもって切り開いて行く事は人間のみでできることではないでしょうか。

刀をふり損じることによって、倉も、たくわえもなくなることもあろう。それに挫けることなく、倉を建て、刀を、というのが人生であり、他の動物との違いではないでしょうか、「倉」に「刀」を入れる「創」、この喜びを感じ、味わいながら生きることが、人生にとって最大の喜びでありましょう。

「創」には、「はじめる」、「はじめてつくる」などの

意味がありますが、「創る」というと、ややもすると、特定の人の活動のごとく受けとめられます。



旅立ちの法然さま 山田良定作

原始社会

の芸術文化は平等であつたでしょう。だが、権力者ができると、権力者中心の芸術文化になりましたし、宗教心の芸術文化もながく続きました。

エジプト

の王様は、自分だけが生きかえるためにピラミッドを創り、ミイラになりました。ミイラになった王様は生きかえることなく、ひからびたみにくい姿を博物館のガラスケースの中にさらし、生きかえる望みさえ持つこともできなかつた奴隷たちが創つたピラミッドは、砂漠の中に生きています。彼等の創つた神像としてのねこは、追真の写実で生命感に満ちています。これを創つた奴隷たちは王様の再生よりも、この像の創作という芸術活動に燃えていたのかもしれない。

中世の職人たちは、神や仏に奉仕するということであつたにしても、あれだけの宗教美術を建設した原動力は彼等の創作意欲だつたと思います。

ルネッサンスで人間性にめざめた芸術家たちは、神や仏を逆手にとって、自己の創作意欲を存分に発揮し、芸術家にとって神や仏は自己の芸術意欲を満足させる手段となつていきます。

近代になると、表現そのものが目的になりました。芸術はだれかに奉仕するためのものでなく、作者自身の生きがいのためにおこなわれるようになりました。

現代になると、芸術表現は天才だけのものでなく、幼



湖風 山田良定作

児から老人まで、貧富や職業に関係なく、すべての人が芸術表現に生きがいを感じるようになり、権力者のためとか、神や仏のためとかいう目的意識はなく、報酬のためにということさえ軽蔑されるほど純粹になり、芸術活動は創作意欲の充足だけが目的となりました。

芸術が庶民一般大衆のものとなった今、様式も多様化し、天才を頂点とする様式もなく、芸術様式は時代に即応してか、スピードを感じるほどの速さで流行し、新し

い様式が最もよい芸術だという錯覚さえ起こさせていました。

しかし、今日に至っては、奇想天外な思いつきにも驚くことなく、個性尊重の時代性と様式の多様化とか結びついて、だれでも勝手なことをして当り前、という時代のようなのです。どんな表現をしても、これでいいのだといえ、それで通る時代、名乗りをあげる声が大きいうが勝ることになっているようです。声の大きさは、表現意欲の大きさに比例するということなのですが、表現意欲の大きさは、生活意欲の大きさであって欲しいものです。生活意欲の大きさは民族の活力の根源でありますから……。

そびえたつような偉大な天才はいませんが芸術によって生きがいを感じる庶民は、かつてないほど多くなってきました。

おとなが会議の余暇などに広告紙の一隅に短い鉛筆で落書きすることも、子供達が砂場でトンネルを掘って遊んでいるのも、すべて創る喜びを味わっている自然な楽

しい活動の筈です。その活動の中から自分をみつけたし、精魂こめて個性豊かな表出ができたと思えば、その次元では混沌としてわからないものであっても、この活力の中から何かが生まれると思いますし、その中にこそ、生きる喜びが味わえるのではないのでしょうか。芸術創造というのは、既に見ましたように人間個有の、そして、人間の本質的な活動でありますし、その体



医学と宗教

— 安楽死に思う —

験を日常の生活のなかで持ちたいものです。

ふだんの生活のなかの行為が美的に自覚され、心身をゆさぶるものにまで純粹化され強烈になればいいと念じます。

役にたつことや利益ばかりを追求して、手段を選ばないやり方が通らないような状況を、みんながつくることにもつながる道でありましょう。

福井光寿

(東京都港区麻布繁成寺住職
福井外科院長・医博)

宗教人としての希望を述べたい。

編集子より「医学のこころ」について原稿を依頼され
たが、私は宗教的にも論議される安楽死について述べ、



アメリカで酸素吸入によって生命が維持されていた患

者に、その吸入を停止し死に至らしめた。また日本でも、七十六歳の父親が三〇年も世話をしてきた三十四歳の脳性小児麻痺の息子を絞殺した。所謂「安楽死」について論議されている。これ等は肉親として或いは家族として、あらゆる努力を捧げてきたが、単に生命の延長のみが真の幸福であろうかの問いの中で、悶絶の中で選ばれていた方法であった。

私は大正大学を卒業し、慶応大学医学部に入り、その後十四年間慶応義塾病院に勤め、現在東京深川の下町で一開業医として地域医療の最前線に立っているが、慶大時代にも、また町医者としてからも、所謂「安楽死」を望まれる問題に数多く直面して来た。栄養は計算されたカロリーをチューブにより送入される植物性人間となった者、骨肉腫で一本一本、手や足を切断してゆく者、或いは癌の再発、膨満した腹部で呼吸困難となった癌性腹膜炎、僅かの体位変換にも激痛を伴う骨転移、癌細胞は肉体の髓まで喰い尽きんとするその患者の苦しみ、また家族の精神的、肉体的苦痛、筆舌に尽し難い様相に数多く遭遇してきた。

医学は、人間の苦痛をやわらげるより、単に生命の延

長だけを尽すことが「医の倫理」とされていた。地球より重いとさえ云われている生命に対し、社会的、刑法的、宗教的そして医学的にも「安楽死」は認められてはいないが、私は「安楽死」の条件付賛成論者である。

私は宗教が大衆に滲透し、教化し、至心に帰命する意を得らるるならば、「安楽死」を認めたいと思う。



昨年は世界医師大会が日本で開かれ、四年毎には医学総会が開かれている。昨年の医学総会は「生命の畏敬と医学の探求」のテーマにて開催された。医学の本来の目的は、人類の福祉への貢献にありといわれているが、宗教も同じであると思う。私は医学と宗教は表裏一体と信じている。医学は「生」への挑戦でなく、「死」への挑戦であり、宗教は「死」の行事でなく、「生」への挑戦であるべきと思う。

翻って私も宗教人として宗門を眺めたとき、現在残念ながらその活発な挑戦を見ることが出来ない。聖徳太子

の時代から、寺は正に社会福祉の中心であり、文化、教育の中心であり、また医院でもあった。そして心身の病める多くの人々を癒していたのである。

爾来、日本国民の大半が仏教信者であるのに、仏教界の安眠があった。その衰退を憂うのである。戦後、創価学会が非常な滲透を遂げたが、従来の宗教に対する不満が然らしめたのであろう。仏教は兎角、主として老人に対しその活動の鋒先をむけていた。私はもっと、青少年いや幼児に対する教化から始めなければならぬであろうと思う。その意味で仏教界の幼児教育は評価されるし、金田進徳氏等の運動する「仏教青年会」には多くの期待をよせている。ただ宗門人のみでなく、広く在家の青少年を含めた運動に発展してほしいと思う。

現代日本では最も大切なものは教育であると思う。日本を永遠の日本たらしむるものは教育—教化であろう。

大正時代一世を風靡した甲州財閥は後継者の教育を怠り現在は絶えた。アラブ諸国に囲まれ、孤軍奮闘し、世界の経済を把握するユダヤ（イスラエル）は、徹底した宗

教教育を施した。私は日本の教育が日教組によって動かされているのは残念でならない。



わが浄土宗には、故椎尾弁匡大僧正以来、傑出した高僧がない。大僧正が提唱していた「共生会」はその意味で優れた運動であった。かえすがえすも偉大な高僧を失ったものである。私は詳らかなことは知らないが、浄土宗費がどれほど国民の教化費に使用されているか知らない。

かつて、私は故光山明道上人（前増上寺執事長）の葬儀が、増上寺大蔵で施行されたとき、上人が心血をそそいで完成されたこの大蔵が、大衆の信仰の道場として、真生正命を求め、真実永遠の大生命を体現して、仏国土を築かれんことを願った。

私は仏教精神が国民の中に滲透して、病める患者が、「発願文」を心から唱ぜられ、真の「往生安楽国」を得らるるならば、「安楽死」の問題はなくなるであろうと思うのである。



一年を一秒に換算しても

浄土教の流れ



たけ なか しん じょう
竹 中 信 常

(大正大学教授・文博)



昨年の浄土宗開宗八百年記念に際しては、さまざまな記念品が宗門当局から、各寺を通じて信徒の方々に配ばられたが、その中でも一番多かったのは「法然上人像」ではなかっただろうか。ブロンズ、掛軸、絵画など、中でも、本誌に麗筆を揮っておられる松濤達文画伯の画像など、全信徒にゆきわたったことであろう。

知恩院にある右京権太夫隆信朝臣筆の上人像は、浄土宗の信徒なら一度は必ず拝んだことがあるはずである。

祖師の像は各宗を通じて多いが、一体、なぜだろう。

祖師在世のうちはさのみではないが、ひとたび入滅してその生身を拝せられなくなると、祖師像を珍重し、時には香華を供えて礼拝する。「祖師よ、いま一度」の心情のあらわれにほかならない。

釈尊が亡なられて、ボツカリとあいた空洞の如き寂寥感は、いかにもしてみたさねばならない。そこで人々がしたことは、「死んだのは釈尊ばかりではない。過去にも仏たちがいて、しかもそれがみんな亡ったのだから、釈尊が亡ることも仕方のないことだ」として、みづからの心に言いきかせ、さびしさをまぎらわせたことであろう。こうした気持を理論づけたのが「過去七仏説」で、

釈尊の前にはビバシ仏、シキ仏、カシヨウ仏など六仏がおいでになった。釈尊は「無師独悟」といって、師匠なしにひとりでさとりを開かれたのであるが、「お前はたしかにさとりを開いて仏になった」という証明を誰かにして貰わねばならなかった。その証明をしたのが釈尊の前に出たカシヨウ仏もしくは定光如来であったというのである。だから、亡った釈尊を思っていたずに悲しんでばかりいないで、心をとりなおそうとしたのである。

こうした過去仏の思想に加えて、釈尊の前身物語（本生譚）が沢山出て、釈尊はこの世に一回きりおでましになったのではなく、過去においても幾度か生れ、幾度か亡っているのだ。それには釈尊の前身が修行のために艱難辛苦したことが語られている。わたしたちになじみの深い「いろは歌」も、これらの物語の中に盛り込まれている。釈尊の前身の修行者が山中で修行をしていると、

色は匂えど散りぬるを

わが世、誰ぞつねならむ

という声が聞えてきた。仏教の教えの根本である「諸行無常」を歌ったもの。修行者はこれを聞いて、是非その続きを聞きたいと願ったところが、恐しい鬼が現れて、

続きを聞かてせもよいが、腹がへっているのでお前を食ってしまふぞという。修行者は教えを聞くためにはわが身も惜しくない。是非聞かせてくれとたのむと、鬼は、

憂（う）いの奥山、今日越えて

浅き夢みしえぬもせず

つまり、浮き世のはかない出来事にこだわらず、真実の道をすすめ、と教えると同時に、その姿は仏に変わった。鬼の形をして修行者の心の強さをためされたというのである。これと似た話が本生譚には沢山ある。教理の上では、人は悟りを得て仏となるには仏道の修行をしなければならぬ。これら仏になる修行をしているものを「菩薩」というのであり、釈尊もまた菩薩として修行されたことを物語るのが本生譚の趣旨であった。

この世に生れたものは必ず死なねばならぬのだ。死んだのは釈尊一人ではない。多くの仏たちもそうであった。釈尊も前世では何回か生れ、何回か死んだ。いくらこうみづからの心を納得づけようとしても、自分たちが親近し、信順した釈尊は現実にはこの世から姿を消してしまつたのである。理屈でいくら言いかけても、情意の上では何ともその淋しさ、頼りなさをみたすことはできない。

仏教では「諦らめ」ということを大切にする。「諦らめ」とは執着をはなれること、こだわりを捨てることである。現在に釈尊を求めることは不可能である。また、過去と諸仏がおいでになつたとしても、それは過ぎ去つたことである。こうして、現在と過去とを諦めるとすれば、残された希望は「未来」でしかない。その時、わたしたちの心に浮ぶのは「弥勒仏」のことである。五十六億七千万年経つと、兜率天からこの世に下生されて、わたしたちを救つて下さるといふ弥勒下生思想が人々の心の中に芽生えたのである。釈尊が亡つて、大体三百年から五百年ぐらゐ経つてこの思想——すなわち「未来仏」の思想が成立したのである。いつか知らぬが、将来、必ず教主が現れてわれわれを救つて下さるといふ考えは、仏教に限つたことでなくキリスト教にも、またその前身のユダヤ教にもはつきりとみられる。これを「メシア思想」という。未来に望みをつなぐといふことは、それだけ現実・現在にあきたらぬ証拠である。ユダヤ教にメシア思想がさかんになつたのは、ユダヤといふ

国が紀元ずっと前の昔から、バビロン（現在のイラン）やエジプトに国民全部が捕虜として連れて行かれ苦役に服したり、ローマの支配のもとでいぢめられたり、地球上でこの国ほど苦難の道を歩んだ国はないといわれるくらいだったので、ユダヤ人たちは早くから現在を諦らめ、望みを未来に托してきたのである。第二次大戦後、彼らはやつとイスラエルという国を作つたが、現在でもまだいろいろと国際上の問題を残している。

こうして、現在を諦らめれば、当然未来をのぞむことになるのは自然のなり行きである。ユダヤほどではないにしても、釈尊なきインドの、とくに素朴な民衆が未来に仏の出現を願つたのは無理からぬ心情といえよう。

しかし、ひと口に、五十六億七千万年といつても、これは大変な未来である。試みにその長さを測つてみようならば、仮に一年を一秒に短縮して換算すると、一日は八六四〇〇秒、一年は三一五三六〇〇〇秒となる。これで五十六億七千万年を割つてみると一七九・七九四五二年となる。こんなバカげた計算をしたのも、弥勒仏がこの世に下生するのがいかに遙かな未来のことかを実感するためである。たとえ一年を一秒に圧縮してもなお

一七九年余もかかったのでは、とてもこの身がこの世で弥勒仏に遭うことはできない。

ところが、それでも、何とかしてこの世に弥勒仏の現われるまで生きていようと決心した人がいたのである。その人は今から八百五十年ほど前の人で、法然上人もかつて十六歳の若かりし頃、三年にわたって師事したことのある皇円阿闍梨であった。人間としてはとても生きられぬ。しかし大蛇は長寿できるといわれているところから、蛇身となって、今日の静岡県・桜ヶ池に身を沈め、弥勒の下生を待っているのである。桜ヶ池にまつわる伝説は今日にも信じられているが、そうした特異の人を除いては、とても弥勒仏の当来を待つことは不可能といわなければならない。

過去には仏がいた。また未来にも仏が出る。そう信じ得たにしても、いま、現に、ここに生きているものにとつて、仏がいまいということは、何としてもさびしく、頼りなく、やるせない思いで一杯である。何とかして現在に仏を求めることはできないであろうか。そうした思いが多ぜいの人々の胸の中に、雲のように湧きあがってきたのである。

— 〇三〇 —

それは丁度仏教が一般大衆の信仰欲求に応えようと、大きく転回した時代、いうなれば小乗仏教から大乘仏教への道すじの一つとして考えられた思想である。これを仏教学では報身仏思想といっている。報身仏というのは読んで字の如く「むくわれた体の仏」ということである。何で「むくわれた」のかというと、仏というものはすべて、仏になろうと発心修行した、いわゆる菩薩の六波羅蜜を行じ、その修行のむくい、賜物として仏になるのである。積尊を始め、多くの仏の過去において菩薩として修行し、その「むくい」として仏となられたのであるから、仏道を修行する菩薩のいる限り、過去においても多くの仏が出たし、未来においてもまた沢山の仏が出る。同時に、現在においても、修行をなした菩薩がいて、必らず仏になるはずである。しかも、その場合の仏は、肉身の、積尊のような仏ではなく、おこないの結果として仮に姿をあらわした仏（むずかしうと方便示現の仏）なのである。このようにして、何とかして現在にも仏がおおいになつて欲しいという大衆の切なる願

いが凝り固まって、ここに報身仏の思想が成立するに至ったのである。報身仏の思想については浄土宗の碩学故望月信亨博士がその著書『浄土教の起源及びその発達』（四三四六頁）に詳しく述べておられるので、ここにはその概略を引用しておくにとどめた。

前にも触れたと思うが、仏には「法」を本体とする法身仏と、積尊のように、わたしたちと同じように、歴史の一時にこの世に生活され、そして寿命を終えて亡なられる——応身仏がある。しかし、目にも耳にも触れられぬ「法」を仏として拝むことは、わたしたち凡庸の人間にはむずかしいことである。また肉身の仏——応身仏

はすでにこの世から姿を消してしまっている。わたしたちが日常生活の中で、しっかりと拝むことができ、それに向って手を合せられる仏ということになれば、それはわたしたちと同じ「現在」においてになる仏でなければならぬ。つまり報身仏である。

わたしたちはやっと、拝む相手を見出すことができたのである。しかも、その報身仏の代表は「阿弥陀仏」なのである。わたしたち浄土教を信ずるものたちは「西方において、いま、現にましまして説法しておいにでなる」阿弥陀仏にたどりつくことができたのである。

松濤達文画伯謹製 法然上人画像

大本山増上寺に奉納さる

長年に渡って本誌の表紙絵を担当してこられ、現在はまた寺内大吉氏の長編小説『念仏ひじり三国誌』の挿絵でおなじみの松濤達文画伯（東京・下谷最上寺住職）

の力作『対話の法然上人像』が、去る一月二十四日法然上人御正忌にちなんだ開眼供養され、大本山増上寺に奉納された。大きさも百五十号（縦一・九五メートル、

横一・七五メートルの大絵像で、おそらくは昭和の法然上人の御影として、浄土宗史上でも画期的なものであろう。この御影一又は、増上寺本堂一階の檀信徒控室の中央に掲額されているが、参詣者は法然上人の暖かい慈愛にみちた眼差しに迎えられている。



『対話の法然上人像』松涛達文謹画

ご承知のように松涛画伯は、現在では宗教美術団体「七彩会」を主宰されたり、諸方面で活躍されているが、かつては日本画の野生司香雪画伯に師事され、一時は、山本丘人画伯の新制作協会にも参加されていた。ことに仏画に関しては、奥村土牛、中村丘陵、鬼原素俊氏をはじめとする巨匠とともに現代仏教美術院を起したりして、長年研鑽されてこられたのである。

今度の大作『対話の法然上人像』は、浄土宗の教化団体「一洗会」の依頼を受けて、画伯が進んで引き受けられたもので、御影に付された表題は、上下貴践老若男女の差別なく、念仏信仰をあまねく説き示された法然上人の尊い姿勢を表現したものである。「つねにやさしく説法して下さる法然上人のそのお心を表現したかった」とは、画伯の真摯な述懐である。またこの絵像が『美術クラブ』誌の昭和五十年年度優秀作品の一つとして取り上げられたことも付記しておきたい。なお松涛画伯は、先頃宗務庁の依頼で、浄土宗沖繩袋中寺に掲額される『袋中上人像』（三十号）も完成されている。



法数術語十二ヵ月（三月の巻）

宝田正道

三悪趣

三悪道ともいい、略して三悪（さんあく、さんまく）ともいう。業によって導かれる三種の厭うべき世界、すなわち地獄・餓鬼・畜生の三つ。これに阿修羅を加えて「四悪趣」（しあくしゆ）という。

三衣

「さんね」とも読む。もとインドの僧団社会で個人私有のものとして許された三種の衣服。すなわち僧伽梨（大衣、九条衣）、罽多羅僧（上衣、七条衣）、安陀会（中衣）

の三つで、それぞれ正装用、学習用、作業用などに分けられていた。元来、路傍や墓地に捨てられたボロ片を拾って綴りあわせたところから、一般に「糞掃衣（衲衣）」と呼ばれていた。これらの三衣に食器の一鉢を加えて「三衣一鉢」といい、インドでは修行僧の私有物としてこれら以外は禁じられていたが、日本では習俗や気候の相違もあって若干他のものも許されていたようである。托鉢に持ち歩く頭陀袋には、多く三衣を入れ「三衣の袋」と呼ばれた。

三衣

「さんね」とも読む。①仏成道ののち、衆生済度のため三度にわたって行なった大説法会のこと。「竜華三会」は弥勒仏が仏滅五十六億七千万年の後に出世のうへ、衆生を悉く救う三会としてよく知られている。②三大会または三大勸会のこと。日本の代表的な勸会は、南京三会（興福寺維摩会、大極殿御斎会、薬師寺最勝会）と北京三会（法勝寺大乘会、円宗寺法華会、同最勝会）とがある。これらの三会に講師をつとめることは大変な榮譽で、僧綱に任ぜられたり、得業や三会講師の称号を与えられたりして尊敬された。(3)禅宗の道場で鐘鼓を三十六打ち鳴らすことを一会とし、百八打をもって三会と称する。

三 猿さる

「見ザル」「言ワザル」「聞カザル」の三ザルを三匹の猿にあて、目も耳も口もふさいで無抵抗主義に徹することを示す。日光東照宮の三猿が名高い。

三 縁えん

三つの原因。終生、断惑、受生の縁。浄土教では唐の善導の説に基づいて、念仏行者だけが受ける三種の功

徳、すなわち親縁・近縁・増上縁の三縁をさすことが多い。また、邪師・邪教・邪思惟の三という場合もある。

三 戒かい

在家の者が守るべき八戒（↓）と、出家の守るべき具足戒と、在家も出家もともに守るべき五戒（↓）とをあわせていう。

三 界がい

一般には人間が生死を重ねる迷いの世界をさすが、本来はこれを欲界・色界・無色界の三つに分けて考える。欲界は姪・貪の両欲を有するものの住む世界で、六趣（↓六道）はこの層に属す。色界はこれらの欲を離れた清浄な世界、無色界は物質を離れた高度の精神的な領域をさす。いわゆる「有頂天」はこの最高処である非想非非想天のこと。

三 学がく

仏道を修行する者の修めるべき三つの根本的な行学、すなわち戒・定・慧の三学をいう。戒学は悪をやめ善を

修すること、定学は身心を統一して雑念を払い、思いが乱れないようにすること、慧学は静慮の状態で正しく真理を見究めること。

三願 さん がん

(1)菩薩の立てる三つの願、すなわち人をして真理を悟らせ、倦むことなく法を説き、いのちを投げ出して正法を守ろうと願うこと。(2)阿弥陀仏のたてた四十八願を、三種に分けて摂法身願・摂淨土願・摂衆生願とする。(3)阿弥陀仏四十八願のうち、特に第十八(至心信樂)、第十九(臨終來迎)、第二十(植諸德本)の三願、または第十八願と、第十一(心至滅度)、第二十二(還相廻向)の二願を合せていう場合もある。

三歸 さん ぎ

三歸依の略。仏法僧の三宝に歸依すること(歸依仏・歸依法・歸依僧)で、五戒と(一)ともに仏教徒となる根本条件である。特に戒律を守ることを誓う場合、これを「三歸戒」という。

三經一論 さんぎょういちろん

淨土教で依憑とする三部經(無量壽經・觀無量壽經・阿弥陀經)と世親の『淨土論』とを合せていう。単に「三經」といえば、般若・法華・涅槃の三經典や、聖德太子の注解した勝鬘・維摩・法華の三經をさす場合もある。

三垢冥 さんくみょう

身心の汚れである貪(むさぼり)・瞋(いかり)・癡(おろかさ)の三つの根本的迷いを、くらやみにたとえていう。

三業 さんごう

身・口・意の三つの働き。すなわち行為と言語と思想の三つで、これに四威儀(行・住・坐・臥)を加えてわれわれの生活活動全般を「三業四威儀」という。

三聚淨戒 さんじゆじやうかい

大乘菩薩のたもつべき三つの戒法、すなわち攝律儀戒(一切の悪をやめる)・攝善法戒(諸善をすべて実行する)・攝

衆生戒（一切衆生をことごとく利する）の三（『梵網經』『瓔珞經』などの説）。また、小乗戒を加味したものとして、律儀戒・摂善法戒・饒益有情戒（『地持經』『瑜伽論』などの説）をさす場合もある。

三 從

女性の三徳として、幼時は父に従い、嫁すれば夫に従い、老いては子に従うものとされた。五障（↓）と合せて仏教の女性觀を代表する。

三 乘

三つの乗物。悟りに導く教えをそれぞれの機根に応じたの乗物にたとえたもので、声聞・緣覺・菩薩乘の三のこと。仏道修行者の全体を総括する場合に用いる。

三 心

修行のための心のあり方を三つに分類して、戒心・定心・智心の三心、下と中と上の三心、菩薩の三心（真心・深心・大悲心）その他、諸説を数えるが、浄土教では浄土に往生するための条件として、至誠心・深心・回向発

願心の三つをさす。

三 途

惡業のむくいとして人間が行かなければならない三惡所、すなわち火途（地獄）・刀途（餓鬼）・血途（畜生）の三惡道をさす。「三途の川」（三瀬川・葬頭河）は、冥土へ行く途中にあって、亡者が死後初七日に渡るとされ、生前の行いによって緩急の三瀬（三途）を選ばされるといふ。河畔には、奪衣婆と懸衣翁がいて、亡者の衣服を剥いだり罪の輕重によって木の枝にかけたたりする。

三 藏

仏教經典を經・律・論の三藏に分けた称呼、またはそれらに精通した人の尊称（三藏法師）。

三 毒

善根を阻害する、貪（むさぼり）・瞋（いかり）・癡（おろかさ）の三種の煩惱を毒に譬えたもの。

三 輩 九 品

阿弥陀仏の浄土に往生する人々を、その素質あるいは修行の浅深によって上輩・中輩・下輩の三段階に分け（無量寿經）、さらにこれらそれぞれの輩を上・中・下の三品ずつに区分したもの（觀無量壽經）。

三部經

依憑となる經典を三部にしほつていう。浄土教では無量壽經・觀無量壽經・阿弥陀經の三部をさすが、「法華三部經」とは無量義經・法華經・觀普賢經、「弥勒三部經」とは上生經・下生經・成仏經、「大日三部經」とは大日經・金剛頂經・蘇悉地經、「鎮護國家三部經」とは法華經・仁王經・金光明經のこと。

三福

世・戒・行の三種の福利業。世福は世間における道德的善行、戒福は教団内で守るべき戒律の実践、行福は大乗仏教徒として行うべき菩薩行をいう。特に浄土教では父母師長に仕え、慈悲心のある善行を修する（世福）、三宝に帰依して戒行に徹する（戒福）、求道心を起して読誦大乘、往生を願うこと（行福）とする。

三寶
仏・法・僧の三つを宝物に譬えたもの。仏教の根本要素で、三宝に帰依（↓三帰）することは仏教徒の基本的条件である。

三法印

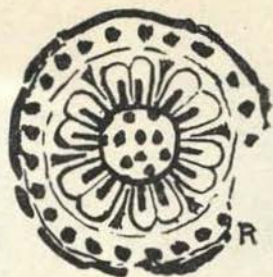
仏教の思想と精神を特徴づける三つのしるし。すなわち諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜の三をいう。

三密

密教で説く身・口・意の三業。仏の身体と言語と心によって行われる行為は、凡人の到底及ばない不思議なはたらきである。衆生がこれを修するには、身に印契をおび、口に真言を唱え、心で大日如来を觀するようにしなければならぬと説く。

三藐三菩提

仏の完全なさと。正遍知、正遍知道、正等覺、正真道、正等正覺などと漢訳する。



■読者の声■

無意識から出てくるもの

吉^{よし}田^だ勇^{ゆう}之^の助^{すけ}

(東京都江東区在住)

自分の年齢がふえるに従って、知人の死が一段と気になってくる。殊に、自分より年齢の下の人死を知ると恐ろしさと、いいようなない淋しさにおそわれる。人間はいつか死ななければならないことは、よくわかっていゝるが、さてこの自分もいつなん時この世から消えてしまわなければならないのだと思うと虚無感というのか、なんともいえない思いがする。

『ブツダのことは——スッタニパータ』の中で、

生れたものどもは、死を遁れる道がない。老いに達しては、死が来る。実に生あるものどもの定めは、このとおりである。また、いかなる所有もなく、執

着して取ることがないこと、——これが避難所にほかならない。それはニルヴァーナと呼ぶ。それは老衰と死の消滅である。

と、尊師はお教えになっておられる。

死に対する恐怖は、人間の本能的な、感情的なものである。無意識下の世界から出てくる何ものかによつて、大師釈尊がお教えになっておられる多くのものが狂わされることがあつてはならないと思つてゐる。

わたしは殆んど毎夜のように、よく夢をみる。それをはつきり記憶している場合もあるし、中には、面白いものがあるかと思うと、又、反省させられるものもある。

夢をみるのは三通りの原因によるものではないかと思ふ。自分の体が睡眠中に受けている刺激による場合が一つ。就眠前、数日前、あるいはなん年前に受けた印象、経験が頭の中に出てきて夢をつくるのが一つ。もう一つは全然記憶にないもの、潜在意識というか、意識の深い底の層の中に自分が知らないうちに受けていたものが、夢に出てくるのではなからうかと思うのが一つ。この三つによると思う。

わたしの母は脳軟化症で恍惚の人になり、九十二歳で世を去ったが、死期が近づくとつれ嘗て聞いたことのない、そして好ましくない嫌な言葉をつかうことが出てきた。現在と過去の区別もつかないにかかわらず、わたしの知らないような古い昔の事などが言葉に出て驚ろかした。深い意識のところから出てくるのをみせられた思いがした。人格も少しづつ変わってきて、人格が二重になってきたのである。わたし自身はこうならないぞという保証はない。おそろしい事だ。

わたしは夢日記というものを二、三書きとめたことがある。その動機は、この意識の底をのぞく方法はないものかと思つたことが一つ。もう一つは、当時、東大教授

であつた玉城康四郎氏が昭和四十二年三月二十四日から三日間、NHK人生読本で「無意識の世界」について話されたものの記録を読んだことによるのが第二の動機である。お話はざつと次の様だ。

「……無意識の領域をさぐるのに有力な方法の一つは夢の分析である。……意識と無意識とが同じ方向に向わないで、ちぐはぐである場合はその人格は不健全なのである。……無意識の世界はユングもいつているように果しもなく大きな世界……それはやがて神や仏の世界に通ずるもの……そういう無意識の世界とまじわっていくことによって、いままで意識的にも小さな自分にとらわれていたものがしだいにそのとらわれから解放されていくのである……」

手を差し入れられない程深い細い穴に、マリを落して、それを取り出せないで困っている子を見て、マリを拾いあげてやった人の話を思い出した。それは、その人がその穴に、水をどんどん流し込んで遂に、底にあつたマリを水の力で上に押しあげた話なのである。

意識的、無意識的の行動、動作が常に一致しているような健全な人格に、自己を整えていく路はないものか

考えていた時、それは、この底深い無意識の世界に、一つの宗教的実践を流しこみ、積み重ねていくことではなからうかと思いたったのである。

その実践とは、念仏であると信ずる。無意識の世界から湧き出してくるものがみな念仏でありたい。ゆるぐことのない確かなものが念仏ではなからうか。わたしのよくなものに、本願念仏による救済の路をば、あの学識無双、叡山第一といわれた法然上人がちゃんとお教えにな

っておられる。日々六万遍もの念仏をお称えになられた上人の無意識の世界は念仏に満ち満ちておられたのだ。無意識の世界から口へ出てくるものは、みな念仏になっているようにありたい。日夜つとめはげむべきである。口称念仏の重み、尊さが少しづつわかってきた。大いなる師、法然上人は仏号を称えながら、静かに入滅あそばされていった。

=俳句鑑賞=

彼岸会(春)の秀句

春秋二回のお彼岸は、年中行事として日本人の心の奥に浸み込んだ習俗であるから、俳諧においても「彼岸会」を季題とする俳句は数が多いのである。

毎年よ彼岸の入に寒いのは 正岡 子規

この句は、「母の詞ことば自ら句になりて」という詞書があるが、何気なく母親の口から出た言葉を書き留めた子規の心には、母親への深い想いが込められている。

竹の芽の萌もえさしたる彼岸かな 芥川竜之介

入日ひ拝む目も衰へし彼岸かな 鈴木 燕郎

西方浄土への願生心からか、日本人には夕日へ想いは強い。ことに彼岸の中日、真西に沈む太陽はまことに象徴的である。竜之介はその夕日に赤く映える竹の新

芽を見据えて彼岸の一句を詠み、燕郎は不自由になつた目を夕日に向けてひたすらに手を合わせている。

お彼岸の夫婦仲よきかたゐかな 森川 暁水

お彼岸のきれいな顔の雀かな 勝又 一透

穏やかな彼岸を迎えて風情である。夫婦の愛情も雀の健やかなさえずりも、寺参り、墓参りの参道にうらかな春の光景を伝えている。

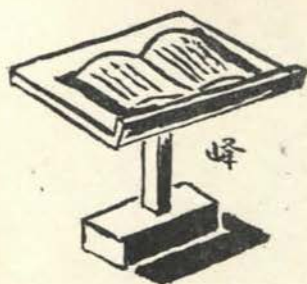
彼岸墓地のみにての知己今年も会う 美野寿満子

この句はまた、人の世の縁のゆかしさを何とも巧みに表現したものである。

山寺の扉に雲遊ぶ彼岸かな 飯田 蛇笏

これはまた蛇笏の雄々らかさが素直に出た句である。

|| 書 の 四 季 ||



墨 縁

— 犬養木堂翁秘藏明賢尺牘との出会い —

林 はやし 錦 きん 洞 とう

(東京三田貞林寺住職・書道家)

○ 墨縁筆縁などというといふと仏縁に比べたら全くちっぽけなものかも知れない。行きずりの中や、行く先々の旅の中で、凡智では測り知れない因縁に結ばれていることを知らされたり、縁起所生の理を論されるということは誰でも経験することである。そこへ行くと墨縁は文人や芸術の世界に限られてくるが、それだけに具体的な因縁話で身近な親しみを覚えるものである。

さて本稿も書き続けて一年、今回でようやく責任を果たすこととなる。昨年第一稿はカナダのパンプで書いたが、あれは春に因んで王羲之の蘭亭帖にまつわる因縁話であった。永和九年歳在癸丑暮春の初めの書き出しで始まる羲之の名蹟である。羲之は書聖と仰がれ、その書は中国書道史上最高の古典であり、日本でも書き手のことを羲之と書いて「てし」と読ました程である。従って書道史のどの時代を見ても名家は一樣に羲之の勉強をしている。これからお話する文激明も明の時代の代表作家

であるが、やはり義之を追求していることがその書蹟から理解される。

○

今ここに犬養木堂翁が愛蔵した明代の著名書家群の手になる尺牘冊がある。五世紀も前のこれらの書家が、當時交流した文人や政官界の人々との手紙文で、中国仕立の表具で全六巻の書冊である。木堂翁自筆の跋文があった、それには大正末期大阪の博文堂から同好の士の為に写真版にして出版したことが記されているが、当時内藤湖南博士や長尾雨山先生の跋文が寄せられていたと伝えられている。また令息犬養健氏もこれに触れた経過を記している。

書冊についてちょっと紹介してみようと思う。第一冊は文激明の手紙文が十一通、文氏一族といわれる子や孫など一族の書簡も六通、第二冊は激明の師沈石田など、第三冊には黄道周がある。彼は明の万暦の年の生れ、四百年前の人だが、明が滅亡して清朝に仕えることを潔よしとせず金陵の獄に繋がれながらも、遂に二君に仕えることをしなかったため、刑に処されたという忠節の人で

ある。その書は明末のロマンや苦渋の中に喘ぎ果てた姿を強烈な心象として謳いあげている。第四冊は木堂翁とも親交のあった清の康有為が跋を書いており、明代屈指の名家祝允明の手紙である。

彼も激明と共に蘇州の生れで、呉中の四才子といわれている人、また別に四才子の一人唐寅・激明の画の師呉寛、書の師であり祝允明の岳父でもある李応楨など、それに允明や激明の門人・姬水・王穉登・王寵・王穀祥などなど多彩である。第五冊は董其昌十通が全巻を占めるという庄巻で、其昌は文人画の祖としても書としても著名で、清朝にもなおその影響を及ぼしたといわれる名家である。第六冊は激明の門人周天球や王鴻儒他が合冊されている。

ところで、この書冊に中心となって出ている文激明と先師祖洞の墨縁についてふれておきたいと思う。祖洞は名を大澄と言ったが増上寺に錫を留め傍ら武田霞洞翁に師事して書の研鑽に努めた。書名上るにつれ、しきりと文激明の書に憧れ研究をしている。この事は先師七回忌に出版した遺墨帖にその書風の片鱗を見ることが出来るのだが、この頃から大澄の澄を文激明の激にもちって大

激と落軟を入れるようになってきている。細身でサラリと書き流してゆく調子が爽やかであった。文激明が趙子昂を経て羲之に迫ったように、先師は激明を追求して、清の趙之謙風之と急変し強靱な意力えと変化、やがて羲之に迫まってゆくのだが、晩年は独自の連綿草を得意として「念力持統」を信条に、透徹した厳しさ激しさを意志の力を秘めて然も大らかな風韻をもって表現している。

祖洞が書道共励会を起してから昨年で五十年を数える。先師が国民精神作典詔勅の聖慮を拝して葛飾水元に創立したものである。そしてまた昨年は先師二十七回忌に正当していた。会としても色々な記念事業を企画実施して来た。私の昨年カナダ・アメリカにおける書のデモンストレーションもこのためであった。来月は上野の森美術館で記念展覧会を開き、併せて明清名家の名蹟も展示する計画である。記念の作品集出版も平行してすすめられている。

こうして記念事業遂行中の旧臘、一日私の海軍同期の桜であるS君が訪ねてきた。彼の幼な友達であるZ氏が同席して紹介された。Z氏は国際的な仕事をしる人で、嘗て知名女流作家の夫君でもあった人である。その

Z氏がある仕事の企画について智恵を借りたいと訪ねてきたわけだったが、その時仕事に関連して携えて来たのが、この木堂翁愛蔵の明賢尺牘六冊の書冊であったのである。

墨縁浅からざる文激明とは、どんな人なのであろう。

彼は明の成化六年（一四七〇）江蘇省蘇州に生れた。五百六年前である。名を璧といい字を激明・衡山と号した。字は後に徵仲と改めている。文人の家に生れただけに詩書画の才能に勝れ、同じ蘇州生れの祝允明・唐寅・徐禎卿と共に吳中の四才子と呼ばれている。その人となりにして介と言われ、周囲の有能な人物からも敬慕されながら和やかな対人関係を保ったが、他面、理非曲直のはっきりした人とは話も合って、親切で頼母しく思われているが、そうでない人間とは、挺でも動かぬと言う頑固さもあったといわれている。だから当世流の無節操や打算的な変り身の早い人物には随分と目障りな煙った人間とされていたと言う。文才は既に一世に上っていたのに、そんな風だから官吏としては余り出世もしてないようである。祖父洪、父林は共に官界で出世しているが、父林は彼が六十歳の時他界した。町の人々は千金を

抛出して葬儀の費として差し出したが、激明は之を受けず、その費用で父を祀る祠を建てたという。

先述のように激明は文字を父の友人呉寛に学び画は沈石田、そして書は祝允明の岳父である李応楨に学んだ。

然し彼の書は元代の趙子昂——禪林墨蹟にも大きな影響を与えた書家——を学び、これを通して王羲之の書を追求した。一筆と雖もゆるがせにしない格律、品格のある書であるが、何ととっても子昂や羲之の風韻を偲ばせるものがある。嘉靖三十八年（一五五九）の卒、時に九十歳であつた。

○

このように祖洞と文激明、五十年記念と明賢尺牘入手の因縁、それらを考え合せて、今改めて、この書冊を手にして見ると、開巻剪刀の激明の尺牘それにまつわる一族の書冊は、誠に墨縁であり、仏縁となつて、如実に実感として私の胸の底深く刻みこまれてゆくのである。会の創立五十周年を記念して何か後世に遺すべき記録をと考えてはみたものの、展覧会や記念帖出版では目慣れている。それが全く偶然の墨縁から、五百年前中国名品と

して元老犬養木堂翁愛蔵の書冊が、生々流転を重ねつつ遂に我が手に歸した。何ものにもまさる記念となつたことを心嬉しく思うのである。千金を投じてもこの記念は価値のあることであつた。

泉下に眠る先師の霊が、不甲斐なき私の姿を哀愍護念され、この書冊を与え賜うて叱咤激勵しているのであらうか。或はまた五十年記念に報恩追孝の至誠心を捧げる会員を嘉して、この墨縁を与えて下されたのであらうか。いづれにしても文字通り有り難きことで、唯々合掌して無南阿弥陀仏のみ。

一世人に勧むるに口を以てし百世人に勧むるに書をもつてすという。五世紀に垂んとする明賢尺牘冊の墨縁は諸縁和合して、生々として先賢の心を今に伝えている。

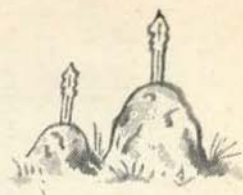
松濤弘道著

新刊『仏教的生き方とは？』

〈浄土選書1〉

新書判 二六八頁 価四八〇円

発行所 浄土宗宗務庁



念佛ひじり三國志

(三)

——法然をめぐる人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

蓬髪(ほうぱつ)のひじり(私僧)は狂女の前へ歩みすすんだ。

どきりとなる。「殺せ」と、自分に命じた。それは出来ぬ、とこぼんだ。ひじりはおのれの手で狂女兵庫を絞め殺すつもりなのであろうか。

だが、ひじりは狂女の前でくると背を向けると、しやがみこんだ。

「おぶっされ」

「……」

狂女の空ろな眸が少し動く。何かを思案しはじめたようだ。

「ここに、おぶっさるんだ」

ひじりは自分の背中を叩いた。

「ああ、あなた」

うるもった声が狂女の口から洩れた。

「うむ」

「やっとお帰になりましたのね。このたびの大勝利、おめでとうございます。戦さは終わりましたのね。もう二度と都をお出にはなりませんわね」

どうやら愛人の公達と幻覚したらしい。素直にひじりの背中へもたれかかってゆく。

「今だ。そのやや児を奪うんだ」

隆信が、死児に手をかけても狂女はさからわなかった。

「どんなに待ちこがれたことでございましょう。これか

＜うつろな狂女、兵庫＞



前号のあらすじ

寿永二年（一一八三）の七月二十八日の木曾義仲の軍勢の京都乱入は、法然上人をして、「木曾ノ冠者、花洛ニ乱入ノトキ、タダ一日、聖教ヲ見ザリキ」と述懐せしめた事件であった。しかしこの荒々しいでき事に対して、平資盛の北ノ方をかかえた東山の法然上人の禅房では、木曾方の参謀大夫房覚明の配慮によって事なきを得たのであった。覚明はかつて信救房と名乗って、叡山黒谷の叡空門あつて、法然上人とは既知の間柄であつたからである。そしてこの覚明のからいによつて資盛夫人は、彼女の生家、嵯峨の藤原基家の屋敷に引き取られることになり、そこでひとりの男の子を生むのである。この男児こそ、後年法然上人の随侍となつた直弟子勢観房源智その人であつた。

しかし木曾勢の乱入によつて、平家の公達に愛された女人たちの運命は大方は悲惨をきわめたのである。絵師藤原隆信の愛人右京大夫に仕えていた女人兵庫もその犠牲者のひとりであつた。

らはいいつも一緒……あたしたちの赤ちゃんを、こしらえましようね」

新しい幻覚の世界を見つめている。そこには死んだ愛児は存在しないらしい。世界は過去へ逆戻りしていったのか。

ひじりは適当に話を合せている。言葉の合い間で、

「早く穴を掘るんだ。草の根っ子を引き抜けばいい」と隆信に指示した。まるで従者に命令する口調である。

だが隆信に抵抗感はなかった。足もとの草を根ごと引き抜くと、やわらかな土を太刀の鞘で掘りおこしはじめた。

今この場で、どう行動していいのか、隆信にはわからなかった。そこで命令された。従うのは当然だろう。

そんな切っばつまった意識もあった。が、それよりもさらに奥深い心理の深層で、隆信はこのひじりに屈服しなくてはならなかった。

さつき、ひじりが吐きかけた呪咀だ。

——こんな乱世にみちびいたのも、みんなお前ら貴族、太刀を佩く連中の責任なんだぞ。

屍体に土をかけ終った。ひじりは野花を一本手折るとそこに差し、狂女を背負ったままの姿勢で読経しはじめた。

その姿に、隆信は見惚れた。

自信にみちている。自分をもふくめ、すべての都人が生きる方途を見失っているとき、この若いひじりは、しっかりとこの穢土に両足を踏んばって立っているのだ。

若い……そうなのだ。むさくるしい蓬髪がまぎらわしいはいたが、いまとつくりと覗いた横顔は意外に若かった。

「おぬしを何と呼んだらいいのかな」

並んで境内を出てゆきながら、隆信は訊いた。

「名前か。みんなは、ほうほうと呼んでるな」

「ほうほう……」

「ほんとうは法本なのだが、言いくくって、ほうほうさ」

「もとは沙弥か」

「叡山の南谷にいた。法本房が沙弥名だ」

「いまはどこに？」

「この先の河原だ」

「河原に住んでいるのか」

「ほかに住むところがないからな」

狂女兵庫を軽々と背負い、ひじりの法本房はしっかりとした足取りで歩いている。

七条河原で、賀茂川はゆるく彎曲する。カーブの内懐（ふところ）が堆積した土で台地をなしていた。以前はそこで野菜などを作っていたが、近年になって人々は近寄らなかつた。飢饉や悪疫で行き倒れた死者の屍体を賀

茂川へ投げ込み、それが岸辺に漂着して、鬼気迫る死臭があたり一帯に立ちこめはじめたからである。乞食さえ住みつかなくなつた。

賀茂川。

それは後年の美しいただすまいから混同してはならない。この平安末期、汚濁しきつていたのである。死屍や汚物の集積場でもあつた。

法然の死後、叡山の悪僧たちは法然の墳墓をあばこうと策動した。死骸をこの賀茂川へ遺棄しようとしたのである。

人も近寄らぬこの七条河原に、法本房は草庵を結んでいた。死体が浮かぶ川岸に雑木や板片を立てかけて、草で屋根まがいにおおうただけのものだった。

狂女の兵庫は、此処へくるまでの間、法本房の背中で眠りこんでいた。背負われた姿勢がよほど居心地が良かったのだろう。いや、彼女としてはあの動乱以来、初めて得た安住の地だったのかも知れない。

法本房はいったん草庵のなかに消えた。隆信はずっと手前、堤のところで待っていた。草庵の内部を覗くどころか、岸辺へ降りてゆくことさえためらわれた。隆信が立つ地点からも流れに浮かぶ死体が見えるのである。

「まだ、いたのか」

狂女を草庵に運び入れた法本房は、隆信の方へ歩んできた。

「あの女を、どうする？」

「どうするか、わしにもわからない。ただ、たいへん疲れている。ぐっすりやすませてやるだけだ」

「それで、明日になったら？」

「明日になったらだと。くだいお人じゃ」

若いひじりの声に、いらだちと怒りがふくまれてきた。

もともとあの狂女は、お前の知己ではないか。そのお前がどうにも処置できぬと言うから背負ってきてやったのだ。知己のお前にすらわからぬ処置、それも明日からのことが、このわしにはわかる道理はない。

と、法本房は言いつのつた。

「今の世はな、誰にでも明日のことはわかりはせぬ。住む家とても一夜限りの宿なのだ。あの庵とて、今宵大雨が降つてみよ。川は増水して、眠っているうちに流されてしまふわ。わしもあの女人も、いま浮んでいる死骸と子どもにどこかへ持ってゆかれるのだ。わしは出家沙弥の身だ。人間を救うのが本業だ。しかし現世の救い方

は、この一宿しかない」

「一宿……」

「今宵、一宿を与えることしか出来ぬ。そんな救い方しか出来ぬのだ。あの女人も、いまは満ち足りた気分で昏昏と眠っている。それだけだ。それだけでも与えられぬよりは未だいい」

言われてみればそのとおりだ、と隆信は納得した。

この乱世で、誰が明日の計画を立案できるであろうか。

さっき感じたこのひじりの確固たる足取り、それは明日のことは考えず、今日のこと、現在の瞬間だけを凝視して生きているからであろう。

「だが幸いに今夜は雨が降りそうにない」

すでに薄闇がきていた。白い月が東山の上空に顔を出している。

法本房は背を堤にあずけると、長々と仰向いた。

横へきて、おぬしも寝そべろ、と言わんばかりに、

「わしはな、叡山の南谷にいた。よくこんな黄昏の空をふり仰いで、想いにふけたものだ」

と、身の上話らしいものをはじめたのである。

人間が救ったり救われたりするということは概念ではない。

と若いひじりは語りはじめる。

概念とは、十把ひとからげの大衆相手ではない。あくまでも一人対一人なのだ。救う者と救われる者が、一対一で立ち向ったとき、真の救いが成立する、という。

「かりに出家沙弥のわしが……もつとも叡山の掟を破って下山してしまった今のわしは出家でも沙弥でもないがな。このわしが二人の人間を相手に仏法を説いたとする。聴聞する者は、それぞれに異なる。知識も性格も、気分も境遇もだ。なかの一人がわしの言葉にうなずいているとき、他の一人は否定しているかも知れぬ。それもある。口に出して否定してくれば未だ良い。心の底で首を振りながら、表面は隣人にならうと努力している。これが困るんだ。混乱を招くだけだ。最近にうなずいた者は、隣人が同調したので自分の理解は正しかったんだ、と自信を持つ。もっと悪いのは、彼らに説法しているわし自身が、兩人を説得できた、わしの考えは正しかったんだ、といよいよ信じこむ。その話をよそへ

<秘密地帯>



も持ちこんで吹聴しまわる。ここから間違いが大きくふくれあがつてゆくのだ。一人対一人なら、そんな間違いはおこらない」

若いひじりは多弁になった。熱がこもって早口になった。

この一対一の救いを具体化するためには、叡山のような山奥にこもって意味がない。あえて沙弥の身分もかなぐり捨てて、巷へ降りてきたという。

「仏法は念ずることだ。仏を念ずることを第一義とする。念仏じゃな」

「わしもそうだと思う」
隆信はうなずいた。

「これ以外に仏法の真理はない。では念仏とは何か。知っているか」

「仏を想い、仏を観ることであろう」

「そうだ。そのとおりだ。だが、どうやって想うのか。観るといふことは何か。おぬし一人だけではかなわぬぞ」

「なぜかなわぬか」

「例えばおぬしが仏相を観たとする。一人だけなら、あそこにいる女人と同じだ。狂った幻覚にすぎぬ。正しい

指導者が同朋があつてこそその観想だ」

「指導者か、同朋かか」

「それもさつき申したとおり、一對一だな。大衆と雷同する観想はニセモノよ。念という文字を調べてみるがいい。今という字と、心という字が合わされたものだ。今、ここにおぬしとわしと二人の人間がいる。二人の心がびったりと合体したとき、それが念だ。二人で仏を想い、仏の姿を觀たとき、そこに眞の念仏が成立する。われわれは寂光土にいることになる」

「寂光土か」

「生きながらの寂光土だ」

「寂光土とは、極楽浄土のことであろうか」

「そのとおりだ」

「人間が、死後にゆける遠い西方の地であろうか」

「死後にゆくところだと――」

「昔からすぐれた僧も俗も、みな修法をつんで、はじめてゆける世界だ」

「冗談じゃない。死んでから往って何になる。それはな、御堂関白（藤原道長）みたいな人に言うことだ。この現世で榮耀榮華きわめ、満ちたりた人生を送った者が、死後になお西方浄土へ往こうと願う。おぬしの身分

や地位は知らぬが、よもや御堂関白などではあるまい」「滅相もない。官位も卑小、財宝なぞ持つてはいない」「そうだろう。この現世をひくひくと生きながら、何の西方極楽か。今この瞬間に寂光土を觀、それを感じねばならない」

若いひじりの吐く息が、甘い香りをふくんで隆信の頬を撫でた。いつのまにか身体が接近していた。体温がじかに感じられる。若さのゆえか。熱弁のゆえか。暖くもった体温である。

「現実に存在する寂光土とはな、今二人の心と心とが固く結ばれた接所にひろがる秘密地帯なのだ」

「秘密の場所なのか」

「さよう、二人だけにしかわからぬ場所だからだ」

手をさしのべてくる。隆信は両手を、ひじりの手で握りしめられた。

画人だった。感情より先に、二人の姿が具象化して脳裏でくつきりと描かれる。

夜の賀茂河原。烏帽子の中年男が、若い蓬髪の僧とも俗とも思えぬひじりと手を握り合っている。

これが生ける極楽浄土であろうか。法本房が言う寂光土なのであろうか。

隆信の常識は、そこに男色の匂いだけを匂ぎ分けていた。そして不潔感を味わった。

ゆっくりひじりの手をふりほどいた。

「とにかく兵庫の身柄はおぬしにまかせよう。あの気の毒な女人を、おぬしが言う寂光土とやらへ連れていつてくれ。それにしても狂女と心を合せるとは、どのようにするのか」

男色の匂いを遠ざけるために、隆信は立ち上がりながら訊いた。

「狂女と心を合せるか……」

口吻に自嘲がこめられている。

しかし若い法本房は自分に言い聞かせるように、やがて語気を強くした。

「わしが叡山の南谷を去ったときは、一対一で、どんな人間でも救おうと決意したものだ。狂女の心とて合わせられぬいわれはない。そうじゃ。あの女人は、さっきからこのわしを、別れたやや児の父親と幻覚しておった。その父親にわしがなればいいわけだ」

「兵庫をたっぷり愛撫してやるわけか。彼女がいちばん楽しかった日に回帰させてやるのが、寂光土か」

「無責任な放言をほごくな。おぬし自身は何一つ出来ぬ

くせに、哀れなあの女人を、それも知己の間柄のくせに、置き去りにして帰ろうとする」

足もとを鋭い刃先で斬りつけられた思いであった。

男色的な接近を、こばまれたことへの意趣がえしか。それともこのひじりには、もともと貴人への憎悪があったのであろうか。

隆信は立ち去る前、勇を鼓して岸辺の草庵まで降りた。内部を覗きこんだ。

狂女の兵庫は安らかな寝息をあげている。

どんな方法であるにせよ、狂女を拾ってきて、おのれの罅を開放したという行為は否定しきれなかった。若いひじりは、自分なぞ及びもつかぬ真剣さで、この乱世に立ち向おうとしているのだ。

隆信は強い敗北感めいたものを背負って、七条河原を離れていった。

三

雨がまる三日、降り続いた。

長雨を眺めながら、隆信ははっと気づいた。七条河原は無事だろうか。

三日目の午後になって、ようやくやんだ。薄日さえ洩

れてきた。隆信は街へ飛び出していった。

例年なく暑かった今年の夏。そこへ木曾勢乱入という大惨事が加わった。

雨と、この晴れ間は、ひとときのことではあるが、都人の顔をなごませた。何となく街をゆく人の数が多いようにも思える。

賀茂川は増水していた。だが七条の堤まで来て、隆信はほっと安堵した。草庵はあの日のまま立っている。ただし水面はぎりぎりのところまできていた。

増水は、あの日岸辺に溜まっていた死骸を押し流したようである。草庵の周囲にはさわやかに変貌していた。

若いひじりは不在だった。内部を覗いたが、狂女の兵庫もいなかった。

隆信は堤へ戻ると、太い樗の根元に身を横たえた。草庵がある以上は、あの法本房はきつと戻ってくるはずだ。待つてやろう、という気になった。

蟬も息を吹き返したらしい。梢の繁みで鳴きつづける。その殆高い鳴き声もさわりにならなかった。隆信は心地良くまどろんだ。

「また、現れたな」

頭上に響くひじりの声で眼をさました。

「兵庫がどうなったか、やはり気になる」

「うむ……あの女人は昨夜、息を引き取った」

「死んだか」

「いとも安らかに」

「安らかに」

隆信はじろりとひじりを見た。

「死ぬ瞬間まで寂光土にいてな、ひどく楽しげであったぞ」

「屍体は？」

「今朝、あの祇園の社へ運んでやったわ。やや兎のかたわらへ埋めてやった」

「そうか、それは済まんんだ」

隆信はまだ若いひじりの顔を凝視している。相手も気づいた。

「何でそんな眼で、わしを見るのか」

「いや……おぬしの手で殺したのではなからうかとな」

「そんなことか」

ひじりは草の茎を引き千切ると、口にくわえた。ちょっといら立つように、それを噛んだ。

「おぬしが考えているとおりだ。昨夜、わしの手で絞め殺してやった」

「やっぱりか。なぜ？」

「なぜだと？ この間おぬしに斬れと言った。それが出来ぬと申すから、数日楽しませて、わしがやったままだ。悪かったかな」

「いや、それにしてもなぜ絞めねばならなかったのか」

「あの女が、正気に戻ったからだ」

「正気にわしを別れた愛人と幻覚したのだが、それからさめた。寂光土から現世へ舞い戻りおった」

「せっかく正気に戻ったものを」

「惜しいか。正気なら、おぬしが面倒をみるというのか」

「そうではない」

「おぬしでなくとも、誰かがねらう。そしてまた哀れなやや児を産み落すだろう。そんな餓鬼、畜生の世界を輪廻するよりも良いであろう。少くとも彼女にとっては」

このひじりを非難する資格が、隆信にはない。狂っている時点で何一つしてやれなかったのだ。正気に戻ったからと言って、あの兵庫に何かしてやれるだろうか。

「この現世での救い方とは、そんな方法しかないものかなあ」

と、自嘲的に感懐を洩らすのが精一杯だった。

「そうだ。正気に戻ったあの女を、わしが心から救お

うとしたら、わしは彼女を妻にして一生愛してやらねばならぬ。それは、出来ぬ」

「……」

「わしはもっと沢山の人間を救わねばならぬからだ」

草の茎をにちゃにちゃと噛みしだく若いひじりの表情は、やはり暗かった。どんな理由があったにせよ、女人の首を絞めた行為が彼の心をさいなんでいるに違いない、と隆信は読んだ。

法本房――

行空と名乗った。後になって東山の法然禪室へ足繁く訪れるようになった念仏ひじりである。門弟の列にも加えられた。

行空は居所を定めなかった。主として美濃や尾張のあたりを歩きまわっていた。

一宿の上人、とも呼ばれた。

一夜の宿を求め、夜を徹して家人に例の「寂光土」義を語り、説伏した。同じ宿は、二晩と続けて泊まらなかつたとも言われる。

この説法が、言葉だけであつたかどうか。諸説が流布されている。

サレバ男女二人寄り合テ我モ人モ二人ガ心ヨカラシ

時ニ一度ニ只一声南無阿弥陀仏ト申スヲ一念義ト申ス也。サレバ寡メニテ一人アランズル人ハ、コノ一念ノ行ヒハ有ルマジケレバ往生ハスマジトテ一人アル人ガ二人ニ成合ヘリ。

と鎮西の聖光上人は「念仏名義集」で行空の一念義（寂光土義とも称した）を批判している。

一宿を求め、ことにそこに女人がいれば、二人で心を合せ、現世の極楽を楽しもうと女犯の限りをつくした法本房行空だった。

その女犯には、坊門局との不義密通があげられている。坊門局は藤原信清の娘で、源実朝の御台所の姉にあたる。後鳥羽天皇の女御とし入内した。仁和寺の門跡となつた道助法親王などを産んだ人である。「仁和寺ノ御室ノ御母」とも呼ばれた。

慈円の「愚管抄」には

院ノ小御所ノ女房、仁和寺ノ御ムロノ御母マジリニコレヲ信ジテ、ミソカニ安楽ナド云フモノヲヨビヨセテ、コノヤウトカセテキカントシケレバ、又グシテ行向（行空）ドウレイタチ出キナンドシテ、夜サヘトドメナドスルコト出キタリケリ、トカク云ヘバカリナクテ、終ニ安楽住蓮頭キラニケリ

と書かれている。

行向（行空の誤まりであろう）という念仏ひじりが「御室ノ御母」の邸に泊りこんで不義密通はしたとほめかし、院の小御所の女房たちを教化し落飾させた安楽房住蓮房が斬罪に遇つたことと一連の不行状としている。

この事件、「建永の法難」についてはいずれ詳しく触れるが、法然門下に法本房行空のような過激な念仏主義者が実在したことはまぎれもない。

その過激な思想や行動を非難すべきかどうか。乱れに乱れた平安末期の時代背景を考えたとき、単純には結論が下せぬはずである。

行空は、安楽房や住蓮房が斬られる以前に法然門下から追放された。それは「興福寺奏状」が名指して破戒ひじりとして行空を追求してきたからである。法然もきっぱりと破門した。

法然門下を去つた行空は、相変らず一宿の上人として全国を歩きまわる。佐渡へ流罪になったとあるが、この「流罪」は信じ難い。もともと居所不明の風来坊であつた。かんたんに捕らえられるわけがない。

佐渡島の両津市に「法本房旧跡」が現存するが、これは終焉の場所ということであろうか。

（つづく）

二 編集後記 二

○三月の声を聞いて、もう春はそこまで近づいている。「冬来りなば春遠からじ」と歌って、冬の到来の季節にすでに春を待ちわびていた想いは、今、眼前の陽光を浴びて穏やかにふくらんでいる。野辺の草木の生命も永かった冬に貯えたエネルギーを、今、溢れるばかりに発散しようとしている。私たちが負けてはいられない。より一層明るい社会に生きるためにも、ひとりひとり、清く潔い活動を心掛け、大きく前進したいものである。

丸窓に春動きある日影かな 喜舟
濃かに弥生の雲の流れけり 漱石

○今月はまたお彼岸の月でもある。十七日が彼岸の入り、二十日は中日つまり春分の日である。日本人にとって民族が長く培（つちか）つてきた習俗であるこのお彼岸に臨んで、今も私たちはお寺参り、お墓参りなどをして、亡き元祖の菩提を弔うのであ

る。こうした行為は今やあまりにも自然なあり様である。仏教に対する関心が若者たちをはじめとする一般の大人たちにとって薄らいだとはいわれても、家族の年寄りが率先してこうした仏事に心をいたすのは、むしろほほえましいことであろう。一概に、老化した仏教とはきめつけられまい。現に、寺の境内や墓所のそこちに見かける子供たちに対しては、何らかのゆかしい影響を与えぬはずがないのである。

○このような社会の状況にかんがみて、私たち仏教人に今こそ求められるのは、積極的かつ熱心な教化活動であろう。また仏の教えのありがたさを少しでも理解された方は、この尊い教えを他の人々にも知らせてあげることが義務であろう。今、春季彼岸会に際して、亡き人の遺徳を偲び、みずからも謙虚に反省することは大切である。そして、その心差しをもって社会の人々と仲良く暖かい日暮しをしたいものである。

「浄土」購読規定

会費一カ年金二、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 三月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十一年二月二十五日 印刷

昭和五十一年三月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇二 振替東京八二一八七番

『ひがん会』春季号

新書判・表紙共 12 ページ

定価 20円 (200部以上 18円)

好評『法然上人と浄土宗』

B6判 96頁 定価180円 (〒70円)

(200部以上 単価160円 送料実費)

〒102 東京都千代田区飯田橋 1-11-6

発行所 法然上人鑽仰会

振替(東京)82187番 電話(03)262-5944番

漢和対訳『和訳浄土三部経』村瀬秀雄訳著

B6判 474頁 上製函入 定価 2,500 円

檀信徒への記念品、贈呈用に是非共ご利用下さい。

万人必読の和文聖典です。

檀信徒心得・訓読・注解つき

『浄土宗^{檀信徒用}のおつとめ』

折本 68 頁 定価 190 円 (100部以上一割引)

折本 80 頁 〈小消息つき〉 定価 220 円 (100部以上一割引)

〒256 神奈川県小田原市国府津5-14-49

発行所 常 念 寺

振替(横浜)8296番 電話(0465)43-1352番